



年間第 23 主日 (ルカ 14:25-33)

(被造物を大切にする世界祈願日)

イエスを愛するために憎むべきものを憎んでいるか

「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」(14・33) 今日、私たち皆が、ここにたどり着けるようにと願いながら、説教を始めたいと思います。

暑いさなか、日曜日に葬儀、金曜日にも葬儀、時間はどんどん削られ、以前の材料を使って焼き直して説教に臨んでいます。私たちはそれぞれ、自分なりの理想を持って生きていると思います。小神学校時代に、私は消灯時間が夜9時半と、あまりに早いのに不満を持っていました。校長先生が濱崎渡神父様、副校長神父様が阿野武仁神父様で、なぜこの消灯時間なのか、まったく受け入れられず、一般の生徒のことを思うと悔しい限りでした。

しかし今なら分かります。小神学校時代は、「限られた時間の中でしなければならぬことをこなす」訓練の期間でした。その証拠に大神学校時代は、小神学校で受けた訓練のおかげで、限られた時間の中で果たすべき務めを果たせるようになりました。

そして司祭になると、小神学校時代の訓練がいかに大切だったかが分かります。司祭になると、自分のための時間を取れない場面がしばしば起こります。込み入った相談の電話、命の危険にかかわる病人のために病院を訪ねる、葬儀が入るなどです。

それが土曜日に一度に重なっても、それでも主日のミサはやってきますし、説教を準備しなければなりません。福江教会は前晩のミサがあります。さらにお葬式が土曜日に入ると、当てにしていた時間をすべて諦めなければならなくなります。

ここで、今週のイエスの招きを重ねて考えるのです。「自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」小神学校時代の私は、「勉強したい人に思う存分勉強の時間を与えてくれればいいのに」という考えを捨てきれずにいたのです。「考え」も「持ち物」の一つです。何かを捨てなければ、イエスの弟子ではありえないということです。

親子の間でも、この戒めは当てはまります。「これくらいは出来るはず。その年齢に達しているから」という考えを、ひょっとして握りしめ、捨てきれずにいるのではないのでしょうか。「この年齢になってなぜこんなことができないのか？」本当にそうでしょうか？その考えを親が捨てなければ、イエスの弟子ではありえないのです。

一方で子は親に対して理想を描いているでしょう。現実の親が理想から外れている、あるいはかけ離れていたら、親を拒絶すべきでしょうか。むしろ、子が親に対して持っている理想を横に置いて、現実の親の姿を直視し、受け止める必要があります。子が捨てなければならないのは、親に対して持っている「お父さんお母さんはこうでなければい

だ」という思い込みです。

それぞれが持ち物を捨ててこそ、イエスが示す十字架を担えるようになります。何かを握りしめていたら、手は自由に使えず、十字架を担うことはできません。私たちが担うべき十字架を担うために、握りしめているものを憎み、手を自由に使えるようにしておくのです。

日本の教会は毎年9月を、「すべての命を守るための月間」と定めています。イエスがまず先に、人類に期待する理想像を「憎んで」捨て、人類の弱さそのままを「自分の十字架」として担い、「命を守り抜いた」方です。このイエスに導かれて、私たちもすべての命を守る生き方を特に今月目指していきましょう。命が守られていない状況が一日も早く解消するように、祈りを付け加えることにしましょう。

◆弟子の条件

14:25 大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。

14:26 「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。

14:27 自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。

14:28 あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。

14:29 そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、

14:30 『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。

14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。

14:32 もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めるだろう。

14:33 だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

十字架称賛(ヨハネ 3:13-17)